

大学生の地域間移動に関するレポート 2024 より

地域選択は“本質的な地域を知る”ことが鍵



リクルート 就職みらい研究所 研究員

徳永英子氏

人材サービス関連事業にて、中途採用についてのマーケティングを担当。その後、新卒採用における、企業・学生の採用・就職活動動向に関する調査・マーケティングを担当。2001年4月よりリクルートワークス研究所にて、「大卒求人倍率調査」「採用見通し調査」等、労働市場関連の調査を担当。主な研究内容は「新卒採用」関連や「女性のキャリア」等。2013年4月より現職

調査概要

調査名	大学生の就職活動状況調査	全体	1482
調査目的	大学キャンパス所在地ごとに、大学生の出身地・就職先分布、地元就職意向、地元就職に対する不安定、愛着度、地域以外出身者における大学キャンパス所在地での就職意向等の傾向を把握することで、各地域の特徴を明らかにする。	北海道	55
調査方法	インターネット調査	東北(青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県)	109
調査時期	2024年1月5日～2024年1月31日	北関東(茨城県、栃木県、群馬県)	33
調査対象	マクロミルのモニターより、2024年3月卒業予定の大学生	首都圏(埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県)	537
回収数	1920人	北陸・甲信越(新潟県、富山県、石川県、福井県、山梨県、長野県)	64
		東海(岐阜県、静岡県、愛知県、三重県)	134
		京阪神(京都府、大阪府、兵庫県)	298
		近畿(滋賀県、奈良県、和歌山県)	30
		中国(鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県)	75
		四国(徳島県、香川県、愛媛県、高知県)	34
		九州(福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県)	113
＜本レポートの集計方法＞			
2024年1月時点で就職先が確定している大学生を対象を絞り、集計を実施した。各地域の集計対象サンプル数は右記の通り。			

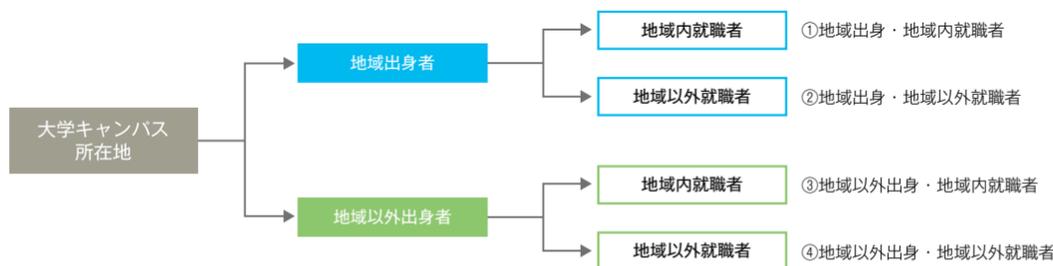
“地域”への着目

2014(平成26)年9月3日、まち・ひと・しごと創生本部の設置が閣議決定されたが、その翌年にあたる2015年に、私が所属する就職みらい研究所(以下、当研究所)にて、2016年大学卒業予定者を対象とした『大学生の地域間移動に関するレポート』を発表した。それ以降毎年発表しており、本稿では最新の2024年卒業予定者を対象としたレポート(2024年3月発表)についてデータ等を紹介したいのだが、その前に、このレポートを作成するに至った背景

を少し触れておきたい。

「学生は、東京への大学進学をきっかけに、就職先として地元や出身地域等に戻ってこないが、何故戻って来ないのか」「大学卒業後、大学があるこの地域へ留まらないのは何故か」といった問い合わせを、企業をはじめ大学関係者や自治体等から頂戴していた当時、学生の居住地域別での就職活動動向はある程度知り得ていたが、地域移動を考慮したデータ等を紹介できていなかったことで、地域に関する学生の思考や志向等を明らかにしたかったことが始まりである。

図表1 大学キャンパス所在地を基点とした出身地域および就職予定先地域での分類



大学キャンパス所在地を基点とした「地域間移動レポート」とは

(1) 大学キャンパス所在地を基点とした分類

そこで、大学キャンパス所在地を基点に、出身地域と就職予定先地域を組み合わせると図表1のように分類し、学生の動向を分析することとした。分析対象は2024年卒業予定の大学生で、2024年1月調査時点にて就職先確定者としている。なお、就職先地域については、まだ決まっていない場合、本社所在地の回答であることを予めご承知いただきたい。

(2) 大学キャンパス所在地から見る4分類の分布及び就職地について

まず、地域の11ブロックごとに、①～④(詳細は図表1参照)の分布を見てみよう。

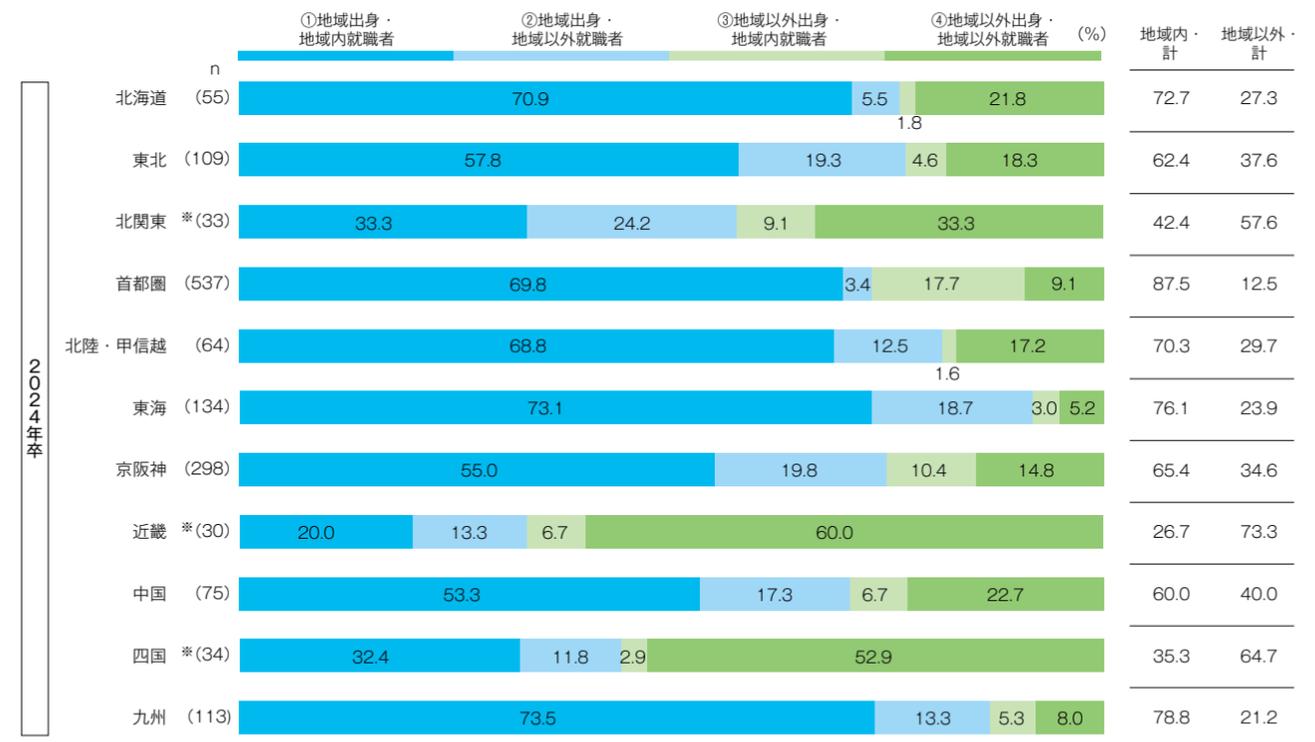
図表2は、2024年1月時点での調査結果の数値としてご覧いただきたい。

地域によっては、地域内に留まる割合(地域内・計)が高いところもあれば、あまり高くないところも見受けられる。

また、大学キャンパス所在地から見た地域別の就職先分布(図表3)をご覧いただくと、どの地域に就職予定かが分かる。

前述で触れた、東京への大学進学を機に戻ってこないといったことについては、こちらを見る限り、大学キャンパス所在地から首都圏への就職予定者ばかりではないことがお分かりいただけるかと思う(卒年によっては、多少異なる)。

図表2 大学キャンパス所在地別の出身地・就職先分布(2024年1月時点) 大学生・就職先確定者(単一回答)



【※】: n数が50未満の場合は参考値として掲載
 地域内・計 : 「①地域出身・地域内就職者」+「③地域以外出身・地域内就職者」
 地域以外・計 : 「②地域出身・地域以外就職者」+「④地域以外出身・地域以外就職者」

大学キャンパス所在地への就職意向について

大学キャンパス所在地域における就職意向について、①大学キャンパス所在地域出身者 と②大学キャンパス所在地域以外出身者 とで分析をしている(『大学生の地域間移動に関するレポート』上での表現と異なるため留意いただきたい)。

また、就職活動前・後の2時点で、その地域で働きたいかどうか(「働きたい(どちらかという働きたい含む)」、「働きたくない(どちらかという働きたくない含む)」、「どちらともいえない」)を聞いているが、2時点を見ると、変化している学生もいれば変化が見られない学生もいる。

ここでは就職活動後の就職意向に着目し、就職意向の理由も含め特徴的なものを解説したい。

①大学キャンパス所在地域出身者における地域内就職意向について

大学キャンパス所在地と同地域出身の学生について、その地域に対する就職意向を就職活動後の理由から見てみたい。

まず働きたい理由としては、「慣れ親しんだ地域だから」や「地元へ愛着があるから」「地元で貢献したい」「家族や友人・知人の近くにいたい」という声が多く見られる。活動前は働きたくないと考えていても、活動を通してその地域の良さを知り、また、働きたいと思える企業等があることを知り得たことで、考えが変化している様子もうかがえる。

その一方、働きたくない理由は、「地元から離れたかった」「希望する企業・業種・職種がない」「独り立ちしたかった」等が見られる。活動前は働きたいと考えていたが、「大都市圏と比べて給料が低い」や「転職するとなった場合の働く場所があまりない」「地元にいることで、今後出られないのではないか」等が見られ、これらは不安要素でもあるようだ。また、個人的な情報を知られることをよしとしない学生もいて、あえて異なる地域へ移動するケースも少なくない。

②大学キャンパス所在地域以外出身者における地域内就職意向について

次に、大学キャンパス所在地と異なる出身地域の学生について見てみよう。

働きたい理由は、「4年間でその地域に親しみ・愛着が出た」「慣れてきて生活しやすい」「大学生生活を通して、友人・

知人ができた」「働くのであれば、大学時代に知り合った人の近くだと安心」等が見られる。入学当初は出身地域に戻ることを考えていたが、活動を通して地域内で就職先を決め留まることを選択した学生もいる。

一方働きたくない理由は、「地元に戻るつもりだった」「地元に戻って貢献したい」「生活しにくい」「地域へ愛着がない」等である。中には働きたくないということではなく、「奨学金返済のため、一人暮らしは難しいので実家へ戻る」といった経済的理由を挙げる学生も一定数いるのである。

大学キャンパス所在地への“愛着”はいかに

学生における地域への就職意向として、愛着があるからという理由があることをお伝えしたが、就職意向と愛着度との関係性はどのようなか見ていきたい。

(1) キャンパス所在地域内または地域以外出身者での愛着のある・なしの理由について

大学キャンパス所在地への愛着はどうだろうか。11ブロックの地域別を総じて見てみる。

キャンパス所在地と同地域出身者と地域以外出身者とを見ると、同地域出身の方が、比較的愛着がある様子うかがえるのだが、愛着がある・なしの理由を見ておこう。

地域内出身者の愛着ある・なしの理由を見ると、愛着がある理由は「生まれ育った場所で馴染みがある」「見慣れた風景がある」「よく知っている場所」「楽しい思い出の場所」等である。

一方愛着がない理由は、「あまり地域内で交流がない」「思い出があまりない」「長年住んでいない」等で、同一地域内でも県を越えて通学している学生からは「大学へ行くくらいで、あまり知らない」といったものも見られる。中には、コロナ禍で外出に制限があったことで、知る機会がなかったといったものも見受けられる。

地域以外出身者で愛着がある理由としては、「人柄が優しい」「自然が多い」「思い出が多く第二の故郷」「大学4年間で馴染みが出てきた」等である。

一方愛着がない理由は、「生活して慣れ親しんだが地元

ほどではない」「大学周辺しか知らない」「4年しかいないから」等で、中には、コロナ禍の影響と思われるが、「キャンパス所在地域には住んでいなかったから」といった理由も見られる。

ちなみに、家族の転勤事情等によりあまり馴染みがないことで、愛着がなかったりどちらともいえなかったりといった声も散見される。

(2) 就職意向と愛着度との関係性

愛着があると、その地域に長くいたいという意向が見えてくるが、就職意向と愛着には関係性がありそうだ。というのも、キャンパス所在地域出身者および地域以外出身者で共通していることは、その地域へ愛着があるとないよりも比較的就職意向が高い傾向が見られるからだ。愛着と地域との関係性を見るに、地域への愛着が高くなると、就職先地域の候補となり得るとも言えるのではないかと思われる。

愛着があることは、その地域に留まる一要素ではあると思うが、学生にとって希望する就職先があるかどうかも重要で、留まりたい気持ちはあるが、希望する就職先がないとその地域から出ることを選択するのだろう。

(3) 地域内への就職意向のあり・なしを分岐するものは

大学キャンパス所在地域への就職意向が分岐するものを整理しておきたい。

地域内への就職意向が高まるのは、自分が働きたいと思う就職先があるかどうか、今後の選択肢の幅の広さ、収入面、生活面が良くなること、その地域のことを知っていることも重要な項目ではないかと思われる。

家族からの独り立ち等を含めて、本当は他の地域で働きたいと思っているものの、経済的な理由から留まることを選択している学生もおり、このことから考えると、経済面を支援等することで、意向が変わる可能性もあろう(地方公共団体の中には、奨学金返還支援に取り組んでいるところもある)。これらのことが、分岐する観点ではないかと思われる。

図表 3 大学キャンパス所在地から見た地域別の就職先分布 (2024年1月時点) 大学生・就職先確定者(単一回答)

	n	就職地 (%)												
		北海道	東北	北関東	首都圏	北陸・甲信越	東海	京阪神	近畿	中国	四国	九州	海外	
北海道	(55)	72.7	3.6	-	14.5	1.8	3.6	1.8	-	-	-	1.8	-	
東北	(109)	0.9	62.4	5.5	22.9	1.8	3.7	2.8	-	-	-	-	-	
北関東	* (33)	-	3.0	42.4	36.4	12.1	3.0	3.0	-	-	-	-	-	
首都圏	(537)	0.7	0.9	2.8	87.5	2.8	2.4	1.5	0.4	-	-	0.7	0.2	
北陸・甲信越	(64)	-	3.1	1.6	12.5	70.3	7.8	1.6	1.6	-	-	1.6	-	
東海	(134)	-	0.7	-	16.4	2.2	76.1	2.2	0.7	-	0.7	0.7	-	
京阪神	(298)	0.7	-	1.0	20.1	0.7	3.4	65.4	2.3	1.7	2.0	2.7	-	
近畿	* (30)	-	-	-	23.3	-	3.3	43.3	26.7	3.3	-	-	-	
中国	(75)	1.3	-	-	18.7	-	1.3	8.0	-	60.0	5.3	4.0	1.3	
四国	* (34)	-	-	2.9	17.6	-	8.8	5.9	-	20.6	35.3	8.8	-	
九州	(113)	-	0.9	-	10.6	-	0.9	5.3	-	2.7	0.9	78.8	-	

【※】: n数が50未満の場合は参考値として掲載

また、地域への愛着のあり・なしも、分岐する重要な項目だろう。生活を通して、その地域の良さを実感したり、友人やその地域の人との交流等思い出が増えていったりしたことで愛着が高まり、就職先地域として選択している様子もうかがえるからだ。

愛着を上げるための工夫点として学生の声から考察すると、当たり前と思われるかもしれないが、愛着を高めるにはまずは“地域”を知ってもらうことが有力ではないだろうか。地元や居住地域こそ身近さ故に、知らないことも多いのではないかと思ひ、改めて地域を知ることで新たな発見ができよう。余談だが、私は東京出身で都内のランドマーク等は知っているものの、誰かを案内するために訪れたことはあってもなかなか自ら出向いたりしていなかったが、訪れたことで、案内した人よりも自分が楽しみ興味をそそられたことも少なくない。また、東京の観光名所等が掲載されている情報誌を見て、知らないことの多さを実感したこともある。

学生の声で「地域内の交流がない」とあったが、もしかしたら交流の場があったかもしれないが、異なる地域からの

進学者の場合、一人暮らし等で不安や戸惑うことで、行動範囲を広げることの難しさが立ちまわることではないだろうか。大学にて新入学生向けの交流イベント等を開催しているところも見受けられるが、積極的に参加する学生ばかりではないだろう。参加を躊躇している学生へ、何かしらのきっかけがあるとよいのだが、外国人留学生と日本人学生とを意図的に行動を共にしたことで、留学生が孤立せず様々なイベント参加を促すことができたというような事例が参考になるかもしれない。

また、“地域との交流”の場があっても良いのではないだろうか。前述で触れたように、就職活動を通して新たな就職先と出会うこともあるため、早い段階の大学入学時より適時、地域との交流を通してその地域内にある企業等を知る機会を設けることで、解決の糸口が見つかるかもしれない。学生にとって身近な存在である大学が、まずは手を差しのべることできっかけが生まれ、産学官で連携を取りながら推進していくことも有益であろう。

産学官連携の事例としては、地域ぐるみのイベントやインターンシップ等が参考になるとと思われる。

結びに変えて

学生を含めた若年層において「転勤を好まず」といった、ある種特定の地域での就業を希望していると聞くと、このことに関連したデータを2つ紹介しておきたい。

当研究所が発表している「大学生の働きたい組織の特徴」の中で、「特定の地域で働く(A)」と「全国や世界など、幅広い地域で働く(B 以下、幅広い地域で働く)」とではどちらを支持するかについて聞いているが、これを時系列で見ると(図表4)、「幅広い地域で働く(B)」の支持者は徐々に低くなってきてはいるものの一定数いるのだが、「特定の地域で働く(A)」の支持者は、2014年卒では約6割だったのが、2024年卒では約7割と、年々増加傾向が見られる。

働きたいと思う組織を選ぶ際に重視する項目(図表5)のうち、「希望の勤務地に就ける可能性が高い」を見ると、2017年卒では45.3%だったが、2024年卒では61.2%と15.8ポイント高くなっており、勤務地を重要視してい

る傾向が見られる。また、自分の希望する企業等があるかないかも重要と前述したが、「自分のやりたい仕事(職種)ができる」が2024年卒では7割を超えていることから、重要視していることがうかがえる。

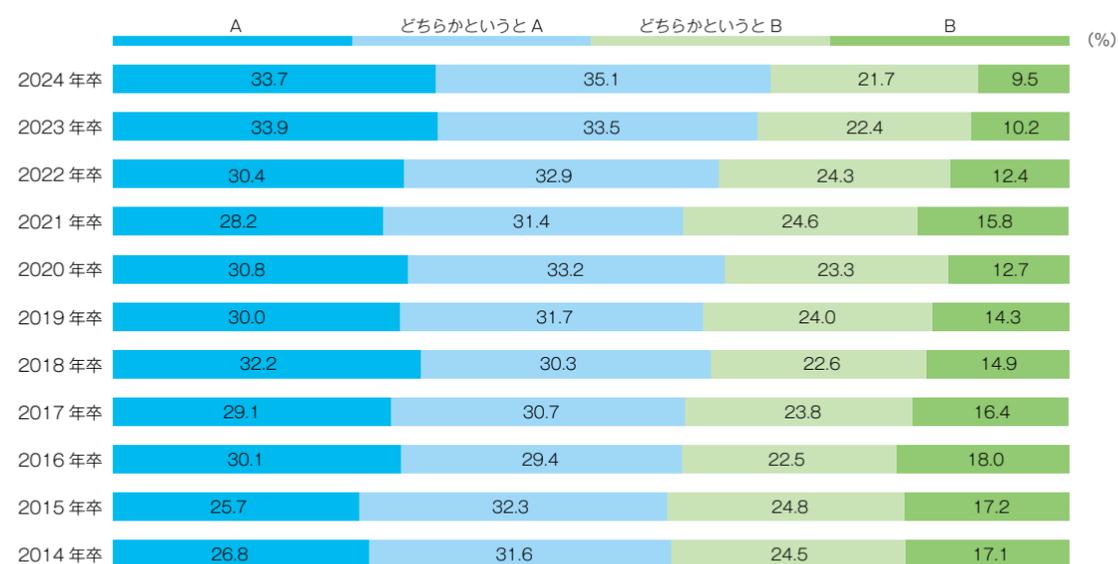
就業経験があまりない学生にとって、就職すること自体に不安な一面も持っているため、馴染みのない地域での生活を考えると、より不安となるのだろう。社会人としてスタートするには、馴染みのある地域の方が安心するの毋庸置疑。働き方を含めた個人個人の価値観について尊重しながら、本人の視野に入っていない選択肢等をどのように提示することが望ましいか、改めて検討する余地はあると思われる。

また、個人個人の価値観に歩み寄るような人事制度改革が行ってきている企業等も見られ、変化してきていることも事実である。価値観は変わらないものではなく、企業等もこれに伴い変化すると思われるため、当研究所でも研究し続けたいと考える。

※レポート全体はリンクを参照
https://shushokumirai.recruit.co.jp/study_report_article/20240329002/
 参考)「特定の地域で働きたい学生が増えているのはなぜか？」(林 2023)

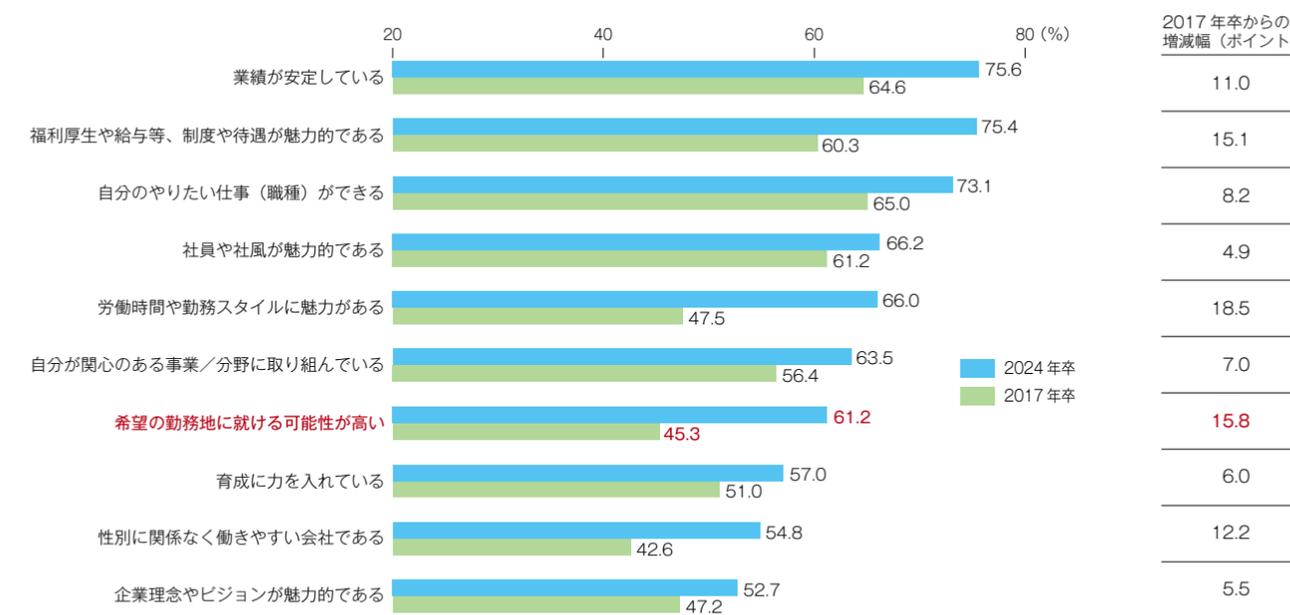
図表4 「A：特定の地域で働く」／「B：全国や世界等、幅広い地域で働く」大学生(単一回答)

※ AとBとではどちらの考えに近いかを回答



出典：就職みらい研究所 「働きたい組織の特徴調査」各年卒

図表5 働きたいと思う組織を選ぶ際に重視すること(上位10項目抜粋) 大学生(複数回答)



出典：「働きたい組織の特徴調査」2017・2024年卒